俳諧
蔦本集
道彦句集
新

艮 二
へ 5
1842
1

序

余乃酒人也左持蟹螯右
舉酒盃無暇學世之所謂
誹諧之詞雖然紙上有墨
者不得不瀏覽焉頃者觀

鈴道彦所撰蔦本集言句々皆有風致足以悦人之耳目於是酒間或摘其句以供於文字飲之具每添豪興不覺一醉倒甕頭矣因書此言于其端爾道彦仙臺之産舎歸金令僑居于江戸以其技鳴于世云

鵬齋老人識

題辭

一狙神の風徳より川の海にあつまりてかれハその金令ゝ古の
ちまきとちうすのロまきくゆうあるか白かの取しらんとろ
あまにみえたるの集この集行のもとくさへしもてあさまし
あ物しるやいちんめいたくしやいえん且千万ツヶ体
中にハ文字をあやまりて不掛紫をさそふ俳人の
句を此のきふ文によまさし其のまふ作とさ人の名ヲ
おしとられたる数若千をあつめるいてやみすかに集は
またうる都人のさきぞれはまつていふ得は流轉とし
拘の海ちまとふむ魚のしたるいふとも道に執るるのみ
にようして是非と口をしくうき蘭しきてすハあらたる
春し夫山のけのうすみ葉く起みま柴拾ちち摘捨
えてさうしくあるは夢の夏のこれすらくきまつ

たゞ高きにひくきに竹にも木にもころぶちかゝく
葉なしてあやしけれとも一度を根よりて一節を
りよせましまゝ是が蔓にも葉が枝にもあきらけく
わかれ侍らんが為この集に標題して呼そむる蓋
のもとの謂なるのミ

一俳家往〻句集を専に家〻の集首と自して
家の風吹絶んを悲しむよしうけつぎたる家の子
傳へたる門人等が紋をいざなしよそに又別に
一家首名利之助が田地持屋敷も蔵も作らせ
ある句福者の家をまもるを悦こそん八芽出度ご生きを
まを云へかれ化して虫にかも成なん耳に仍すをと
すかすをと思ふ画来とて身につかず撰に定めて何
某が句集なとして時是をなす人の目の翫なるべき

するの業なりけるや忝の世を恥りられよとて一期の
歎とも成すてゝる人の心乃清らに少ゆるといつまで
さて塵の社裏に筆まめ於護物と云ば及むおのて
の志れ者こそかりの正徹法師のおゝるんあともの草
根集をやんごとなきまりけん安子尼にあつまる僧の
草稿は晩稿に捨て集め出あつめ侍る年〻経ふく
よろしみる叙らてし言を持ける愛〻くの蓋の花
扶科に斗らせられし我大よの名飛なきなよる筆達
目しるかゝる目に遭ハおもとなき時やなが俗の所用
家にあるさし刈られし心地そそこへやるめる

一前に云文字にふて筆動もすれ共去違して後集に
出きたる拙の多を改め正さんの思ひを企つるに
いつもの蓋の如なり俟まなん羇旅感偶にまれし物の

常の題號によらす歌仙の徴をとり撰さん人の為に
そのよしを載て序の詞を厭ふ人も日其席にも
證とて自他の作家明らかなる人の名を記し
撰さんと思ふ人他の家の集によらす頼ふへし
右事　序ゟ終

蔦のもと春之部

改正

すなほしきあらた名なれや王の春

さほ姫やこ柄のはしハ詠られと

元日白家し二日に題す

望賀人はふた翁の慕のちきら

芽の柄も持んちすまつ暦

鶴亦来歳を迎へて御世かな

梅可寸来の初懐紙は弱筆

武人筆の一字をとりて題に擬り侍る

大和にて 玉の光りも 申す字

り春 初の 穀 手あくや やよ 硯

若川 春は菜にても来ぬやおもしろさ

立 梅は来てもたるや 四十雀

よしこの御寺にて年籠の

通夜中なる旅の宿にかゝる事と

吉野なる家や暁鳥日来て

ゝ家へ御戸さしくゝ己心を

家又作之年ありい了

東風なり

初空し残波も弥縁白の御座

正月にはまた足袋せくる夜さ

梅翁の挨拶よろしく春たつ石

松竹や小さらめたらのとれて来る

万歳やはるとおくる歳もさん

菜や書きてさせし事年韻

豆畑のあとゝ兎の子日ゝの雨

七種

わか菜の夜 飾れるも更けにけり

櫓たく 杉葉もはや 菜かな

宗川も 水ぬるむ野の芹

讃壽星寄白鹿之圖

埒雅曰鹿乃仙獸性能自樂角下必懷瑞蓋有蒼有白有玄皆千歳之後而所變之文也壽星豈不愛乎

東の捻是手摂む帯きか川 暦

春風

ちるゝ花や日吉の芹も折りて 李

春風に糸先之きや 京 吉良

よき人のよ都中に似し春の空

春のはや青葉捨ても花そそる

ちらちらと松もおりや春の雪　木

山の花ものゝさうく　拝枕

霞

月雪のおかげ霞の鉢巻

小池にも汀をかしく霞む日そ

霞白の風さハくと寐られけり

和讃にもしらぬ比りの月霞む

鶯　雲雀

うそかんと

雲雀のうらやましや空を飛ぶ里

黄鳥の汐ゝしまゝれし　小藪ゝ寄

鶯の声さそや鳥をしらぬ

うそ啼やまかられ初音梅か鶯
めさ鶏の旧良日永し鶯の啼
山陰も見さへあれをふく雲雀
ひなかす霧ぬひとも空に字ふ
東の人に験の草をきられけり

猫恋

ともの屋根の直かおひを孫との啼

この味をつゝも没そん杉ゝ猫
山ゆゝ川あなさの猫の来るすよ
や傷孫てうても春ハわされぬか

白魚

ふ代金も笑てハえらぬ白魚かな
老ろいもの歌よまゝるゝ内儀かな
白魚の水すてられた学のもえ

白いきの姿してふく躰かな

櫻の木は花のに葉まで走らす汁

梅

山寺の梅さハうしろす立すがた

こゝせんぬたかちもすゝし梅花

雪の梅帰雲の庵も白ふ有し

恒元か梅も咲けり千代の春

せつきの朝鳴のかやりとて

ちりて後背中に櫻ハちやうとし

子あるえぬ覚えしとそれ〆めの花

さ咲くゝ涙さ笑良や花の梅

梅の香りや梅にも色つけ川法つかける

宇めの家巷ひとねさくせのる

古丈ハきよくる紅やうめの花

梅　厚發

さす傘の江戸に梅見も群れにける

冰茶に小鳥の羹もうめの花

久しふりに云て並ふる梅つくしき

椿

一本の葉を持てる椿かな

庭の椿呆軽中華てさらぬさ

信じらぬ古くあれやちぬ椿

とかくして人目をしのぶ椿の雨

柳

とりなりて荒るる宮のやなぎかな

菅原生の為植つくる社　厚濃
みちのくの社文卿玄雄の家人さて
年ふ旧いつれもかうて左ゝしの老邑
との事承無しく涙かいしみかしさりの

すたれてこの東光に詣けるに

むしゝく　漫罷宗皇

文殊なく百のきれる舞台

田かし鳴亀あき路八草りうく

きつ草やわされ史をとるちち

あとよその跡は見くれの末

串よれよこん前底ある東の字

夕けやきるかまなる藤の花

清くらし清むや樓の居まにも

如月

きはしきや肉紙の画るの小海螢

二日灸や裏まてゆる清語次町

如月や毘沙門まへの薔薇より

まはしきや錦織にある井の小網

乳子盗路一塵蝶君のこ
ことふらやむ画し

春の月あらん年する所ハ哉さ
うかいして娘寒山か先頭の月
葉采の一聯に似たる朱の月
出かけおふ見とめてたふし朱のさ
かしこなる人りきり奈山と焼

飾　埜やうまそぬるふかく籍
こちらふも田中の非やうちと埜
ワタ出り　籍の立つ隊　春寒こ
雲霧を見そりて居るや畑の塔
春の水まさ小くろ女ね見ゆる也
霊あより峰を後ての七隊の首
うちぬれ男もの下まちれ幸の首

まれこめて白うき恥人春の香

春雨の漏家もるゝ梅か香

と顔の露ハつの露よりは波よる香る

便船もいかなくなるや半納め

風雪中

雁すえぬ寒とてハなかし南晴

切なくを聞て聞なくもなき鶯箕

山居

はよりれハ志らし都里の雁か來る

紅梅

紅梅を志らハ佛にまおり里

紅梅やとゝめのまにはのうけ里

紅梅や南こうれとして様さ庭

菜の花や蕪の花や小家ゆく

まんなかや浦ゆかし人の里の春

蒲公英や菜より蝶の居次手

相生　足利より色紙

はるさめも胡葱語へよし日和

摺臼もなく軒のひまさや母子くれ

燕しちも翔うつく日の菜ちる

まよひ子も菊のまい体そたへ庵咲

三葉まてらましふかうれ清来ず

雛子

草先や小家のうけもたしの春

酒をうけは摘も花や帯雛子の色

雛子家くや人を身にまれ舟の宮

孫この子は雛子乗せし戸口かな

帰雁

尾ふるやたゝみの鹿も帰るとて

ゆくてにかさしてめくる扇の音

門田から立しらやうてゆく雁か

苗代田ふしたるは垣根にあしめくら

帰る家の積柾小屋はしるさうな

春の鳥ゝ飛雲あちらに尺ゆく也

罪なきのいとけなさや雁の子

牛込宿八幡の境内市中を去
る咫尺ばかり林泉ところ〳〵
ふりけり 代山の松風を
おさしむ

角蔵は雁もとゝぬ社哉も去

蝶

おろしところれる春や草の蝶

まちまちにいひやてるよの猿
人は来るものあはれし　花こそふ

幟

紫のれんしかりとまゝて　かく幟
うつたへとかくは書しく　幟かな
弓あつらきを　折くあられかな　たつ幟
足もとの余をまち出けり　晴り　幟

雛

よくみまて　坊か妻かと　雛買
邊足り拾もしところ
花衣　雛のむかへ　をられけり
菜をはし　清もあつて　雛の宿
けつくめしを　梅花すゝかな

氷よりや足の弱さにあそひなく

手未伐て大さへ遅き日はたる哉

内かへりつけてあふなけれぬ

一蕙のさゝえ　笠よ

生けのもしや親の待まやる青野かり

花

大つ嶌のちる沫人に見られけり

誰か寄のきる馬よ曳す花の山

花の寺入日追つて拝み哉

花に目走らるあまてや無尋の句

霍芝集中両吟の時之士朗にこたへ
の望をうちそへて出たし桂情の句

句よりそてうし待ちかねと案の宿

荘巖寺の満花生滅と己の積の案
も皮としうらに覚侍りて

いつもてもあそんきしゝや花の寺

虫の声了し暮て寄なむしるさ

花ちらす古径ハ親もなしん娘かな
孝の眼もうちしけつらん花の宿
寛永寺　五百
常執千代の花をさまへし夢かな
悦しの蓍麦も抜え去郷し塵
大八下茶挿ん寺も花ちり香
東叡法王の御舟あふさきまてて

花七日風のきはうち花あれけり

　花の上ある月夜も結さめやう風呂
　坐に風をりつきまる漢物を引とるとて

花おちや九品にあて暮の花
傘借りる講も出入り茶の山
唯識の法の中あれや七日
曙や芝の茶さけの人に来体
花ちる風七ヶ小姫ら手をまねく

勧進能あはるゝとし

ちる花にまくらけふなや能古良

まれ覧色隠れたる見え家へし

宗貞かしこき友も春花見

上野より信濃路へ赴きし比

花をみて清禮中さん菜の花

取帰りて寝し宜加や花を二季哉

花にみえたるんの雨しや里走りて

木母寺

口ちらしく土提に出けり土提の花

酒打ほしく株立まひなり

さて人しの醒莚かし

ちる花に雪のみえたり小風哉

花見て樹ふし掛ゝの雪しさ

櫻

あるゝへきおとこもしら川桜

ゆきしらて桜咲てくる月夜かな

不変不離の清さも花ハ清らかさ

玉川ニ庵を主とせし比

あをし松の科まて散るに清桜

桃

桃の花厨に残れも絶る趣

酒に清き庵主の比に急梅一季桃咲に
椿なし題を撰ミきこ哉ニ

若梅も忘れて神も世も花とし桃

けふ此の花ハ家中の桃の花

山

ふきとちよく見えて来る幸夷ふ

ちりもせてあくる木瓜や字の中

子さるてや木瓜みも実さへある

木陰さも来ぬ花に残りし咲
あふ春にわかれてゆく残る藤
山かけや藤の下家又見ゆる

山吹

山吹や春の帰りを惜しさ味
やまぶきは咲て嬉しきされ乃季
山吹やあまる藤のこゝもゆ哉

菫

わが迄と来る子の松乃下すゝ迄
世の草とゆたかに草つむ
あたりにもあるはすみれ八口をしき
藤垣の藤葉に先ゝぬ程のまれ
きて咲ためりなき
若くて後に見えてゝよなすゝ氣
広屋ゝ咲もすますれこゝき葉

拱ら豆の花よせ移る　枝葉かな

山人や蕪にまじて木實植る

また其の柳庵に又来たりやある画に
待るに此年八十ふたつもあとちきたりける時

蔓そてもおなじにまくるて　蕎の種

此よ池されかうらるる　春のくも

足利より望みけ越ける時

ふるまで代の松ふれ行春のくも

行春

ゆく春や背戸門過て麦の畝

春色し春や　野路ゆく川の岸

夏まつや　蝶瀧の白絣羊

いつはる紫蘭のもとより葉にまむ
里の家より八十なりてすゝやとをす波
に出でさなる哭しつゝゆき風く生涯に走り
出て十時にとりはく黄昏なりけり

焼とらる門の埋をし哭きれし

文化三年なる波人をいつきぬるすゝも
なりて明日こそ帰馬に水かゝんとする方の
わかく久しきのあめかなに足そゝる家色
とも家絶と替る人くしの焼き押さゝら
るやには一人のくさしうる風く成りは為
よし西に此地の北部はいまそりの祢足とを
紺んとふ人

男家も出しかたりし人の末なし

六哥仙讃

黒主
ながき年おもきもなかりし出足条りな

業平
なさけにもなかりし人の立よまし

遍昭
嫁菜に八幡さけを嵯峨家居を

小町
もと色もも実をもつ花をそてよ

康秀

春芽ふく林の史をさゝ鹿しつう

喜撰

ひさ鈴の浴にものさし字毛絃歩む

鶏旦より人日まで七草と云ふ滑稽にて
ちなみをも台七種とやしてこの十体歌に
あつめ載る七ものゝとも戯ける事

茶亭

一ト鍋の元日七つ押さしひたふし

二日ゆる粒ゆ法らん数ゝ法くら

縁雪とひよも越しけさ三日可有

印糕とつうけも尺を娶や四は月

粒もちや五日とし家のめきう須寿

七草の林茶梺ても猿へ六日年

志る巣まなかいちる すゝ菜の香

蔦のあへて夏之部

東坡笠牲ふを見あしきをしきと
たれなる胡準の枕んをとらうし娘
老の末ふさ芸祭の尊楽ひ 分る小窓
能みれ出られてさむし 来つけ芸祭

十附又芸祭の芸号あるまるるとや

能人をとくす座まく 大ふきるえ
夏来まる叢子波され 書の董

花と見し人もちらすや錦見橋

あらし吹てふりよ卯月のまちか川

鎌倉のこてふて段々のけくひろり
まりへりし云十二の手鏡をおかむこの
北方のけしうりし一騎の波ハ出る
風をはおろうれまて出家さるよて
そしよく見へるまてうしあらせ
て思うまての多かる

卯月ほも曇りて露を十寸鏡

杜若藤棚の葉隠ハ来るらんや

夢ゐさ佐門川ありやまち絶

大事なあるす下馬を知らさる
巨蛙作り絵る 家文あり

源川に幸作り絵をん佛生會

し起人のいさせ来へ佛生會

夜に入るるけるゝ忘れやいと夜兄

夏に山その葉ぬ人気し十時雨

は川 錦秀子 解見堂に侍りも
うまとるは

暑し又記し川六浦の麦葉さし

金澤よりさらに絵好人は八景ゟも
四石亭も知る人ぞしる

まつ寄る扇の下や四石亭

三崎の出はづれのよろしくは應安二年と
ありける積あをとハことの地のさかて
おそしまれめ其のもの々しき彼
松下結ぶ行すて見知らぬ秋の風を
まり行ようちさへしけるらり松
下僧の菜味よ手洗人た麿るとるや
扇扱ひいやるまふりて波てしま
風の形り

御歳よりいきゆし見人たくさあ
此ほか寺家記述をも松の味の舟より見送
くさも館龍の家らきり日ワたれ寄る所し

葉はもほ川寄社あさ雨しくさ奏
柚の花まそさへてもまて郭公
来る寄やおかのくもり杜鵑
深川よ汐先岸や子規

此ぞのうつき亀ましまん亀井戸に
諸たくる人ゟ翁のいましめあさる

そら縄ハおそろし社鬼の川是あらす
しろにて立たる形とそれに連なると
こゆるをしれの百八法まつりてこの也
けなる形とあそんり翁ハ法しの白童
にて神に法ましまするたもしめたるや
されハ門人これを松のそれに法むと
神のしけひきのよみるむくひ事うとか
人家ハ人家して出て待りけれと

賤ともの小耳うちや法ら

小石川小日向にての吉原

みち戸殿て飼きくせりけり　杜宇

江上數峯青とハ詩せしか神白の句し

蜀魄帰りて江上數峯青

海てよりハ春のくれそうらん　郭公

草津の温泉にまかりてありし侍る比

あ比まうけて春くや出根の子献

閑古鳥

やさしくも飛あるそれつかんて鳥

菜古寄なしや緑日迄清くら
ちさ日まもなしやつま菜古寄
むかしの咲日の花すみん古寄
閑古鳥啼や薄雲郭一聲
鶯も老努けらし　梅田枇杷
苗喰ふ年も走りしや坊子

汐先やしほも踵くいなき菜花
古枚披双鳥且秋兵庵を出まゐらして
三子ま四人首行程ふゆれをとり扶桑寄
を経ゑて定むる日をまちる面白かり
これハ足跡を洗氏賛を記しあけなとし
おのしあるかの心はをあなたるいふは毎
あるし蕭三劍の筆字うつまぬらなるて
なし童曰破り袖笑しなる人の
尺人をぬをなりん
ちる宵のふくれしまて寝入り龍
本寄の精笑哉の其莫をうけて庵の錦ま
むかし是れへきの四阿を庵坊子志つくひかけ比

かハほりの枝さん料は京の宿
出るめし畈とんで居るハ啼ばかり
小庭や盞とられし蚊の遊ひ

胡瓜さへ苗てふ流りをまつ鰹
江戸橋をくゝらぬてハ松魚かな
鮎提ます家の昔さや野のうち

みしか夜や大野の萱原きれもせ
團扇もちて出るハ多しなつの月
なつ山や江戸明るる裏の門
立山や雲はし走くら

一休も毒喰はせし牡丹かな

ちる迄も夜ハちるなよやよ牡丹
牡丹の名あれこれかそへよる中ニ
寺社の牡丹そめしむさされる名ハ
うちつ香し梅ニ似たり京迄
芍薬や黄ニ雛すり日うけ家
咲る百合此室のたえ記する依家とて
百合さしなえ此晴なへて
清うそかしにあまれ也崖の花

唐うの白ひ乃すく罌粟の花
貧乏も仕得もてへよ萩の花

杜若

手ニ折てハよく飽れあまりつゝさ
この此ま菖すまけりや燕子花
魚毅ても清うハさびし杜若
高栂や見る人も居らず杜若

さひしさや火を焚家のうつくしさ

庭ありて卯花ころや田一枚

兄ありし見て卯花折しむかしかな

小百村ハ右書の温泉寺の雪をさけ人として
冬ハ里に住して四月八日を時として又山へかへる

卯花に明ケし戸も淋し　小百村

葉ちりくや世にうき人の出あるく　日

法親王の御染筆あるへし

ゆう櫻くれの御菓子屋系杉こそ

曲その菓子ころあ道すかう櫻

仙臺侯の菩提所なりし瑞宝
寺とて文庫を立て見るに我
をとくとのうりハうよせて只
ちしもね

椿ちるや七夕かおりの出物よく

本も蔓まかりて篭るや碧の完

写りけり萍の葉さへ見えにけり
玉と川紫のかゝる藤なみ
はゝき木の梢めぐらし時芽人
箏や姫瓜の袂に小風吹芸
子をも守て露も持けり竹の親

昔より菖蒲を男峰の嶋
野をや手苗植ても出やゑまず

所思

今こそや寂しき太刀を飾られし

梅百著草刈る煙むら川煙草
廿月百を浪よりの波の声鳥

きつき百合の小枝を折はゆく

五月雨に水のゝ切し　小寺かな

はらゝれや金魚飼ふる　蝶北漏

五月雨まけて守敏か桃なるらん

玉ころ百や青蘆ものゝ　くる家

さゝ舟ゝ色も渓の影りつ　浮草

ときて木や去ぬれてそゝの皐月百

九朴坊様に大草の割見をさそれ
てころ木へあて移
壺羊山北日よりをうあ記
あてつて

之角冬に咲や香の書　嵐

合鏡さくや世ゝあるをはる　豆腐茶屋

富士川の今鋳よりは深き哉

行に咲や去年の六部の一周忌

豊偽花に夜ま来かり山の町
下闇や将のあらく小草原
何せ我嬉しうつゝ本下やく
康頼法師か宝物集に縁り
申家ころ
世にハ涼ん夜刈芦の丸ねして
夜すゝ我蘆に経ありや手長鍛
摘もとゝ藻にも花經所 莫律原

門出し川出きハ青刈 苗ちくも
早乙女よ夜色の咄もし数座し
植し泥にすまぬよ菜や黒葉さく
うやうし植くもりし田一枚

水鶏 附りけり 轉

史見鼓しても来ん在らす鶏
さ寐されも来住よすゝ鶏ハ待ちけむ社

谷の戸や雪も未だ末よ 鳴る鶯
括りもし 明けれとや 鴇の人
稀の夢路 消る 此節より 花 学
常にも 揚の 振舞へ 芦 家さ
子 かくしも 席 えれ ある 疲 さるよ
穀 さんた 此も 新 家 火串 す

草薹一名物有

日ハ尽し 花及 月の 背なし 井
乃より 声も 扉とあらめ 氷 室 ち
祇園会の 事にもよ 乾先やん 大
葉 大 田も 茂つく 目る 土用入
この体なき田ハ 花情のくはりて
さり田らに 其 来廻し

あたまりや果なし坂の奉加帳

馬廉今はの光りあまりや雲の峯

雲の峯大光宿し入りて涼

蘇鉄の田中を行くや雲の峯

夕立の蓮の宿せつハそゝりき

涼浮や今のあとらぬ湧清水

水甚清れハ魚住まくけるやらし
人絶てかゝされハ関をそさはし

すゝしさや下野の原中二人旅

舟すゝし錨をも思ハ芦分て

江島

不浪根に波やさゝなみ海涼し

宮守に歌問ふとも すゝしけ峯

馬子も也宮原部より八ツ下り

乙姫の床にかへしきるむしろか

簟挑うつくしよしとて床入

とかく友も挑子ますうく四十めく

玉縫ひは團扇にもあつし汗拭

床縫かり團扇とふかり先にけり

提子周に簟殿達の象敷き

そよそよ吹かし夕の金毘羅

すゞ探や扇にあふく馬の面

蟬

大日の接子もあくり日蟬の声

蟬かなく出ゆるとおかりくしくに

瀧かけりすえかほそしせゝの宅

蓮

萩の節原か一のきん哥や蓮の花

野朗霧ゆうすえて蓮白ふ

浮蓮に魚寄らんとてやりけり
是これハ夜そさるの人哉
蓮池の満ちてさうらふ雲の蔭し

梅子

蓮生や香てしをきになまてし
帯夜乃は香るハ寄るもなん梅さき
梅か香よりさきも出し　鶯出橋

雲白や声や焚く香に夜津涼て
色る形や麴子の汁も香さし時分
蟾めくし来るや中かうの逢よ里
花へも香に志ち草白の花や庄床裏茂
　心に思ひかる事哉
直にれて麻の毫ハ糸ほひ香記

山の道も夏にやとめぬ雛しら那

漏斯の首すに筆にくし　落舞の露

小竹より影あらく宵や　菊の露

瓜よりも口や幸子で痒みをもうし

脊の縫目より寄て所を袖の古座

寐たる庭しや梅が香しくし　一筐目

びんく夜酒ところ笋のさくり　時

御祓

御祓の夜七夕姫に　指す　みれの

御祓して風にほくまんの葉に画

出直たや書事よる連てはし　綾川

随翁のいつくしまれし小娼のその
形しきへきり口数唖まれる程涼しさる
康八十才津ちもしる家

夢の合歓そのまゝとも抱し枝やまとも

わかき人の筆まゝにいひ出さるとて伯父
なりける人の許より宣経が家き
紙の代急永く見送へとて清女が枕
の草紙を送りこされたるに老さる
家にハ光そふ金泥のも誰あつかるん
地しつゝ只うつゝの世とのみなれ

保くる光の翠を雛か見えんとの料紙

俳優の勤三郎存生しき中村歌右衛門か
七人を見えまかりけるに七人連なるもを
りしと梅素が傾城をいひ出しよりまへ
難しれハ猶そにつくれるにハなり
ぬさしてもの外に瑞嬪にあそる

枝の中にも泣鬼見ゆる眼誰光生

大磯の虎が十九のころ髪に襞しち
うけ縫ひとしくそふらけへるる袖の
扉やらしれん口とりのさらハかあけて
鞍の上にはしのへ来るさしするの舵
うきさら縫の讃

寄土くさんとみえまとかざす扇の家